

富士山は日本の象徴である。すべての日本人は富士山を誇りに思い、外国人が富士山を称賛するのを当然なこととして受け止めている。欧米において富士山のイメージを広めるのに有力であったものが、浮世絵に描かれた富士山の画像である。たとえは

「富嶽三十六景」である。浮世絵は、印象派に大きな影響を与え、ジャポニズムという、日本文化崇拜の流行を生む原動力の一つになった。北斎の「富嶽三十六景」を通観すると興味深い特徴が見いだされる。なんと80%以上の

反射板

描かれた富士山の画像である。たとえは

富士山の遠景、中景、近景

荒牧重雄

沿いにひしめく倉庫が描かれているかなたの地平線に、富士山が小さく描かれている。小さいため、富士山は白色の三角形としか表現できないような描かれ方も少なくない。しかも、それでも富士山の存在感は大いである。画面の上下隅には大きな岩穴らしきもの

があるが、中景の数は10枚には達しない。驚くべきことは、近景と呼ぶべき画はわずか1枚しかない。「諸人登山」と題したもので、裸の岩肌の斜面を12名の登山者がよじ登っている状態を描いている。画面の上下隅には大きな岩穴らしきもの

が描かれ、中に数十名とも見られる人々がぎっしり座り込んでいる。座禅の窟であろうか。富士登山は現在ブームである。遠方からはるばるやってきて登山する人々は、初めて富士山の近景に接することになる。彼らはそこで混雑した登山道、商業化した山小屋など、清澄で神々しい富士山のイメージとは異なった光景を見る。これでよいのであろうか？

(東京大学名誉教授)